遺構から出土した遺物は小片が多い。右の10点のみ図示した。1~3はSP01の掘方から出土した。1は土師器杯A、外反しながら立ち上がり、口縁端部を内側へ巻き込む。器表は摩滅し、暗文の有無は不明である。2・3は須恵器杯B蓋。2は焼き歪みが認められる。いずれも笠形を呈する。4はSP02から出土した杯B蓋である。5はSD01から出土した須恵器杯Gである。丸底を呈し、ヘラ切り不調整で、内湾気味に立ち上がり、端部がわずかに肥厚する。6～8はSD06から出土した。6は須恵器杯G、底部は平底に近くヘラ切り不調整、直線的に立ち上がる。7は土師器皿、1段の斜め放射状暗文が施されている。8は杯Bの底部である。9・10はSD07から出土した。9は須恵器杯G、底部は丸く、ヘラ切り不調整である。口縁部はナデによりやや外反する。10は須恵器高杯である。口径11.6cm、器高6.1cmを測り、口縁端部は玉縁状に丸くおさめる。

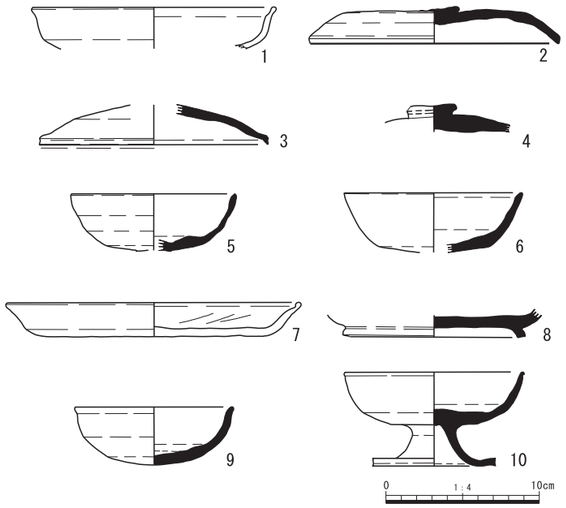

図4　遺構出土遺物実測図

総括

調査の結果、極めて濃密に遺構が存在していることが確認できた。調査範囲の制約から遺構の広がりや性格については判然としないが、切り合い関係から溝が先行し、柱穴がその後に掘られ、少なくとも2時期の遺構があることが判明した。出土遺物からこれらの遺構の時期は総じて7世紀末から8世紀前半と考えられる。調査地周辺でこれまでに発見された墨書土器や瓦のように遺跡の性格を明らかにする遺物の出土はなかったが、今回の調査により当地に律令期を中心とした遺構が広がっている事実が判明したことは、地域の歴史を知る上で大きな成果といえる。

報告書抄録	
ふりがな	やまんじょみなみいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	山所南遺跡発掘調査報告書
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第15集
編著者名	中川　猛
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター
所在地	〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1　　TEL（079）252-3950
発行年月日	平成26年（2014年）3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
山所南遺跡（やまんじょみなみいせき）	兵庫県姫路市（ひょうごけんひめじし）広畑区蒲田二丁目（ひろはたくかまた）4番1	28201	020388	34°49′29″	134°38′37″	2013.4.23～2013.4.28	54.67㎡	宅地開発

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	遺跡調査番号
山所南遺跡	集落跡	奈良時代	柱穴、溝、土坑	須恵器、土師器	20130037

ー例　言ー

1. 本書は、兵庫県姫路市広畑区蒲田二丁目4番1に所在する山所南遺跡（遺跡番号：020388）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は株式会社サンヨーハウジング名古屋からの委託を受け、姫路市教育委員会が実施した。
3. 本発掘調査(調査番号:20130037)は、姫路市埋蔵文化財センター　中川　猛が担当した。
4. 整理作業は、平成25年度に姫路市埋蔵文化財センターにて実施した。
5. 発掘調査平面図は世界測地系を使用し、方位はすべて座標北である。また標高は東京湾平均海水準（T.P.）を基準とした。
6. 図1は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「姫路南部」を使用した。
7. 土層名は、『新版標準土色帳』（1999年度版）に準拠した。
8. 本書で使用した遺構は以下のように呼称した。　柱穴→SP、溝→SD、土坑→SK
9. 本書の執筆・編集は、中川がおこなった。
10. 表紙の拓本は、秋枝芳2010「蒲田山本遺跡」『姫路市史』第7巻下　姫路市より転載した。縮尺は軒丸瓦が1/4、塼が1/8である。

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第15集
山所南遺跡発掘調査報告書

編　　集　姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1
発　　行　姫路市教育委員会
〒670-8501　兵庫県姫路市安田四丁目1番地
発 行 日　平成26年（2014年）3月31日
印刷・製本　丸山印刷株式会社
〒676-8566　兵庫県高砂市神爪1丁目11番33号

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第15集

山所南遺跡発掘調査報告書

調査区（北から）

平成25年(2013年)

姫路市教育委員会

調査に至る経緯

姫路市広畑区蒲田二丁目4番1において株式会社サンヨーハウジング名古屋による宅地開発が計画された。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である山所南遺跡に含まれている。同社より文化財保護法第93条に基づく届出が提出されたことから、当該地における遺跡の包蔵状態を確認するため、確認調査を実施した。調査の結果、遺構・遺物が確認され、事業地に良好に遺跡が包蔵されていることが判明した。このことから兵庫県教育委員会の発掘調査の通知に基づき遺構を破壊する深度まで工事の及ぶ敷地西側の擁壁部分（54.67㎡）を対象として本発掘調査を実施した。

遺跡の立地と環境

山所南遺跡は姫路市の西部、姫路市広畑区蒲田に所在する。遺跡は、東方に飾磨区山崎から今宿まで延びる山塊、西方に雪彦山系を水源とする夢前川に挟まれる平野部に立地する。標高は概ね8mを測る。遺跡の周辺は、昭和58年に着工した区画整理事業によって、景観が大きく改変されたが、区画整理前の空中写真等からは条里地割の残存や夢前川の旧河道が読み取れる。周辺には弥生時代の山所遺跡、調査地から約300m北の山麓には古墳時代後期の山所群集墳があり、対岸には下野群集墳が存在する。調査地の近辺では、区画整理の際に墨書土器、陶硯、施釉陶器とともに唐草文を施した軒丸瓦や塼（表紙参照）が採集されていることから、調査地の東側に蒲田廃寺が周知されている。なお、当地には南北朝の兵火により焼失したと伝わる法道仙人開基伝説をもつ長谷山蒲田寺の伝承が残っている。考古学的にはその所在は明らかではないが、地元では調査地の南側にある山所公園にその所在を想定している。

調査の結果

調査区は南北27.4m、幅は約1.8m～2.2mである。基本的な層序は盛土、耕土、旧耕土、黒褐色土（遺物包含層）を経て黄褐色土（地山）に至る。遺構検出は地山面で行った。検出した遺構は、ピット、溝、土坑等である。調査区の幅の制約から相互の関係が有機的にとらえられる遺構は少なく、性格が判明するものはない。ピットのうち、明らかに柱列が通るのは、SP01、02、03、04である。調査区内で対になる柱列が検出されていないことから、西側へ延びる建物の可能性を指摘したい。掘方は方形を呈し、概ね60cm、深さは遺構検出面から50cmを測る。柱径は約10cmを測る。これらのピットの並びはN2°Eで正方位に近い。また、調査区外へ延びるため確証は得られないが、SP28・30・34の通りもほぼ同じ方位に並ぶ。また、SP25、27、37、41、42、46、48、50、53も掘方は40～60cmを測る。SD02-1、SD03、SD05、SD07はN25°E～N29°Eをとる。幅20～40cm、深さは遺構検出面から3～5cmを測る。SD01、SD02-2はこれらの溝とほぼ直交する。SD04、SD06は方向が異なっている。SD06は東西方向の溝で、幅84cm、深さ18cmを測り、SD03を切る。また、SP18がSD02-2を、SP28等がSD03を切っていることから、溝がピットに先行する。また時期は不明であるが、SD01の周辺で地山が径約60cmの範囲で赤化した部分を2箇所検出した。そのうち一箇所はSD01に切られている。また、SK03の底面も赤化しており、埋土には炭化物が含まれている。遺物が出土していないため、時期は不明であるが、前述の赤化部分も含めて当遺跡において何らかの火を用いた活動が行われていたことがうかがえる。

遺物は遺構及び包含層から出土した。包含層からは須恵器の出土が目立つ。杯蓋は大半がかえりが消滅した段階のものであるが、かえりが付く個体も若干認められる。総じて7世紀末から8世紀前半の遺物が多い。また、弥生時代の土器・石庖丁、平安時代から鎌倉時代の須恵器杯や椀、鉢等も出土していることから、今回の調査範囲では遺構は確認されていないものの、遺跡は弥生時代から鎌倉時代まで営まれていたと考えられる。

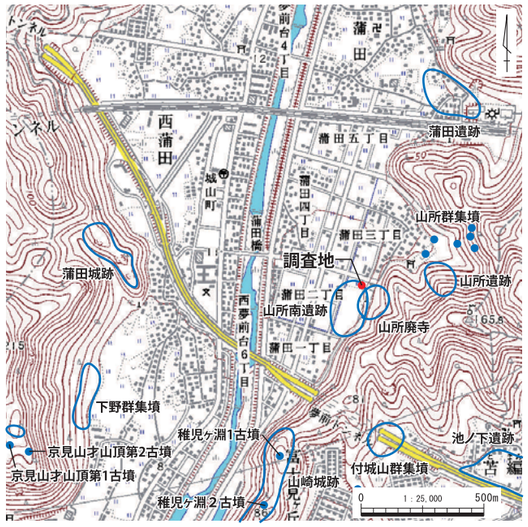

図1　調査位置図

図2　調査区配置図

写真1　SP28から34（南から）

写真2　SK03完掘（東から）

写真3　赤化範囲検出状況（東から）

写真4　SP01から04（南から）

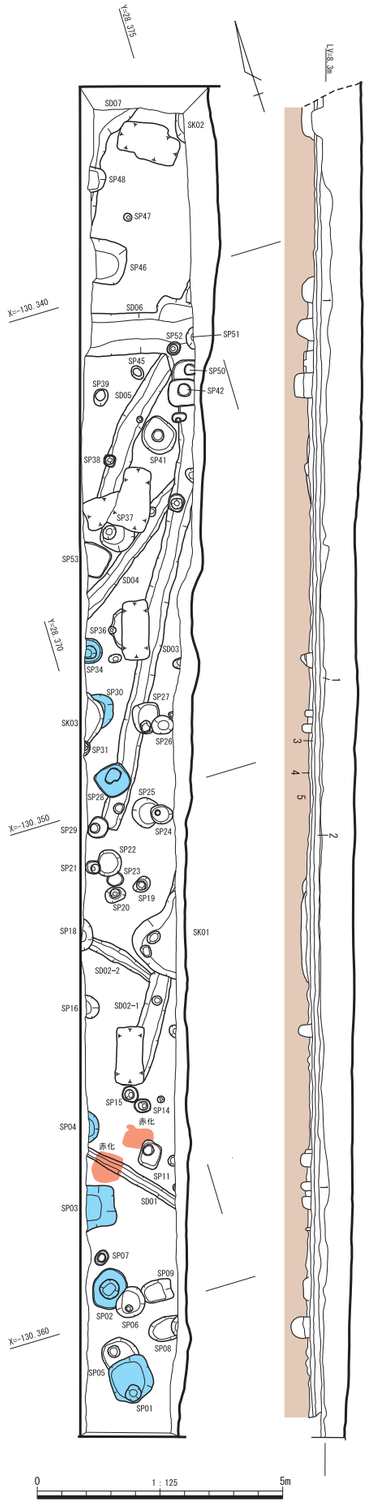

図3　調査区平・断面図

写真5　SD06（東から）

写真6　SD06以南の遺構（北東から）

写真7　SP37遺物出土状況（北東から）

写真8　SD01遺物出土状況（南東から）

写真9　調査区東壁断面（南西から）